

エレクトーンのお仕事

「演奏する仕事」
ジャズピアニスト音楽に関するものすべてに興味を持ち
自分らしい音楽を生み出す

今月は1stアルバムをリリースしたばかりのジャズピアニスト、佐伯真梨さんが登場。ジュニアエレクトーンコンクールで全国大会まで出場したほどのエレクトーンの実力を生かした、現在の音楽活動についてお話を聞きました。

取材時写真/田中大造 インタビュー&文/一北朋子
取材協力/ヤマハなんばセンター

佐伯真梨さん

(さえき・まり)

兵庫県出身。音楽家の両親の影響で幼少期よりさまざまな音楽に親しみ、小学1年生でエレクトーンレッスンを開始。ジュニアエレクトーンコンクール'94全日本大会出場、ジュニアオリジナルコンサートでのテレビ番組出演などを果たす。大阪音楽大学音楽学部作曲学科(作曲専攻)を卒業。在学中よりジャズピアノトリオでの活動を開始し、卒業後はソロのピアニスト、キーボードプレイヤーとして、ライブでのセッションや演劇の劇中音楽など幅広い演奏活動を繰り広げている。作曲家、アレンジャーとしても活躍中で、音楽創作グループ「Horizon」に所属。ジャズやクラシックといったジャンルにとらわれない作品を発表しており、今年6月8日に自身初の作品となる2枚組アルバム「Annabelle」をリリースした。

どんな仕事?

トリオを率いライブを中心に活動しているジャズピアニストの佐伯真梨さん。演奏家としてだけでなく、作曲家、編曲家としての顔を持つ才能あふれる“音楽家”だ。大阪のJAZZ-ON TOP ACTⅢ店(8月13日にライブ開催)や神戸のライブハウスでジャズ系の自作曲を発表し、さらに音楽創作グループ「Horizon」のメンバーとして楽曲を発表するなどクラシックの世界でも活躍。また、演劇やミュージカルの演奏も手掛けており、ジャンルを超えた活動を展開している。こう書くと、パワフルでガッツあふれる女性をイメージするかもしれないが、当の佐伯さんはゆったりした口調から柔らかな人柄が感じられる癒し系。楽曲も、想像力をかき立てるリラックス

ミュージックだ。

そんなマルチアーティストの佐伯さんが、初のリーダーアルバム「Annabelle」を6月8日にリリース。DISC1はトリオ演奏によるジャズ(童謡「しゃぼん玉」のカバー含む)を、DISC2にクラシックナンバーを収めた、オリジナル曲の2枚組だ。

「ジャズライブに来てくださる方にも、私のクラシックな作品を聴いていただきたい。その逆も。CDを出せばひとつにつなげられるかな、このアルバムでつなげたいと思って」

レコーディングと同時期に妊娠がわかり、出産までのタイムリミットのため制作は急ピッチに、また自主制作の予定が京都の老舗ジャズライブハウスRAGにデモテープが渡ったことで、完成目前の段階に急きょ同レーベルからの発売が決定する

など、リリースまでうれしいハプニング続出だったそう。

「癒し系というか、聴くと元気が出るとよく言われますね。あー私だなと思える、自分らしさが詰まっている作品になりました」

仕事を始めたきっかけは?

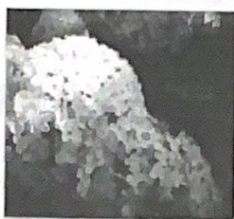
多方面で活躍する佐伯さん、音楽キャリアのスタートはエレクトーンだ。父はジャズピアニスト、キーボードプレイヤー、母はヤマハ音楽教室のシステム講師と最高の音楽環境で生まれ育ったが、本格的に音楽を始めたのは意外に遅い。「小学1年生でエレクトーンレッスンを始め、ピアノはもっと遅くて4年生から。普通はもっと小さいときから習わせるのかもしれませんが、親が音楽をやっている反動か

ら、私が違う世界に行くのを恐れたようで……。実際、親が講師だと私が言うことを聞かないので(笑)、よその先生に習いに行きましたし、家でも親の前では弾かなかったですね。聴いてないふりして「そこ違う」なんて言うので(笑)」

小学4年生で初出場したコンクールで地区大会、中学3年生で全日本大会へ出場と、才能は瞬く間に開花。“ひとりで全部できるのが魅力”のエレクトーンを通じて、音楽を自由自在に楽しむ喜びを知り、ジャズやロックなどさまざまなジャンルの音楽と出会い、アンサンブルで力を合わせて音楽を作る魅力を発見したという。

「実際の楽器じゃないけど、エレクトーンでその楽器を“疑似体験”しているから、曲を作るときにイメージしやすく、今も作曲や編曲に役立っています。中学のときに、学校の作曲大会で金賞を取り、そのころから演奏より曲を書くほうが好きになったのかも。音楽の基礎をしっかり学ぼうと、大学は大阪音楽大学の作曲学科へ。勉強したことで作曲方法も変わり、それまでの“自分が思ったことを楽しく曲にする”というものから、数ヵ月ほど掛けてじっくりと作り上げるようになりました」

大学ではジャズピアノトリオを結成し、ビル・エヴァンス、キース・ジャレットらの楽曲を学園祭などで披露していたが本格的な活動に至らず、今につながるきっかけは、あるアーティストの言葉だったという。「『どうなりたいの?』と将来を聞かれ、『自分の曲を演奏したい』と答えたんですが、『それで? その先があるやろ?』と聞き



1stアルバム
「Annabelle」

ラグマニア
XQCJ-1007 ¥2,500

返されて。その言葉をきっかけに、漠然と思っていた将来を具体的に考えるようになり、積極的にいろいろなことを実行するようになりました。卒業後はソロピアノの仕事をはじめセッションにも参加。そうやって知り合ったライブハウスのオーナーさんに「やってみない?」と声を掛けられて、リーダーライブをやるようになったんです。音楽の世界って結構狭いので、意外な人が意外な形でつながっていて、そこから道が広がる感じが。そうやって築いた人脈が今の活動に役立っていますね」

やりがいと苦勞

ライブが活動の中心とあって、やりがいを感じるのもライブの場が多いようだ。「お客さんからの言葉ですね。震災後のライブでも、『迷ったけど来てよかった』『元気が出た』と言われ、演ってよかったと思いました。また、共演者によって、曲が自分の手を離れていくのも醍醐味。人の手が加わることで、自分の予想以上に曲が進化していくんです」



ジャズピアノとしてだけでなく、クラシカルな作品を生み出す作曲家としても活動する佐伯さん。所属する音楽創作グループ「Horizon」の作品発表会が11月4日に行われるため、新作の準備中だ。

ただ、「MCは司会者が欲しいぐらい大変」と言うほど苦手。また、現在は育児中だけに、時間の使い方に苦勞している。「練習や作曲は自室にこもってじゃないとできないので、家族の理解と協力を得て、自分の時間をやりくり。その結果、短時間でも集中できるようになりました。あと、出産したことで、活動ベースは落ちましたが、ライブで動じなくなったかも(笑)」

「いろいろな音が出るのがうれしいみたい」とお子さんにエレクトーンでの演奏を聴かせることもあり、将来セッションできる日が楽しみだそうです。

やってみたいと思う人へ アドバイス

「ピアニストだからこれは必要ない、じゃなく、音楽に関するものならすべてに興味を持つことが大事。幅広くアンテナを張っていると、何かが引掛かってくるんですよ。私は、ミュージカルでの演奏活動が役立ちました。シーンに合わせていろいろなタイプの曲があるため、常日頃から『音楽ならなんでも』じゃないとダメで、私も最初は困りました。“音楽の引き出し”をいっぱいにしていくことで、いつか役立つときがくると思います。そして、何よりも自分を信じて“続ける”こと。やってみてダメだったとしても続ける。そうしたほうが後悔しないと思うし、考えるだけでなく、実際に人前で弾く場を作ることは大切です」



(上) 6月20日、坂崎拓也 (B)、柴田亮 (Ds) とのトリオで、レコ発ライブを開催。アンティークな雰囲気のあるジャズスポット・神戸の真屋宗兵衛にて。(右) 自宅のエレクトーンで遊ぶ幼少時の佐伯さん。システム講師をしていたお母さんの前で練習するのはイヤだったとか?!

